

氏名(本籍)	ねもと	たけし	根本達(東京都)
学位の種類	博士(国際政治経済学)		
学位記番号	博甲第5535号		
学位授与年月日	平成22年7月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	「不可触民」解放運動とともに生きる仏教徒たちの民族誌		
主査	筑波大学教授	博士(文学)	前川啓治
副査	筑波大学教授	博士(文学)	関根久雄
副査	筑波大学准教授	博士(文学)	鈴木伸隆
副査	日本女子大学教授	Ph.D.(文化人類学・民俗学)	関根康正

論文の内容の要旨

本論文は、現代インドにおけるナーグプルの仏教徒「不可触民」における宗教と政治の関係性について、彼らの「文化」への関わり方に焦点をあて明らかにし、解放への実践の取り組みの可能性を提示している。

まず、「不可触民」の歴史的背景と解放運動を概観したうえで、「不可触民」の政治文化を、1. 解放運動における「アンベードカル化」とよばれるアイデンティティ・ポリティクスに基づくものと、2. 日常生活における「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒化」という慣習行為とに分け、前者が被差別経験の理由を発見し、差別の苦しみから回復しながらも、後者を遂行する仏教徒「不可触民」を「半ヒンドゥー教徒」とし、またキリスト教に改宗したさらなる周辺者を「改宗キリスト教徒」としてこれらを排除するものとしている。

こうしたジレンマに対し著者は、「アンベードカル化」と、日常生活における親族の紐帯やヒンズー的習慣が究極的に相互排除的なものではないとし、ナーグプルで布教している日本人仏教徒実践家佐々井秀嶺の運動を取り上げ、(アイデンティティ・ポリティクスの戦略のように) 必ずしも仏教へのコミットメントだけを強調し、他者を排除する閉鎖的共同体を形成することなく、日常生活における対面関係の網の目を包摂する開かれた仏教徒の実践として提示している。

序章では、インドにおける仏教徒「不可触民」を対象として取り上げる理由を述べ、オリエンタリズムによるインド表象の問題に文化の構築と近代の再帰性という観点から言及し、認識と実践の両面からの関わり方の方向性を示している。

第2章では、19世紀初頭からのナーグプル市の仏教徒たちによる「不可触民」解放運動の歴史的・社会的背景を考察している。アンベードカルによって開始された「不可触民」解放運動が、後の佐々井の取り組み、イギリス植民地主義、インド独立運動、経済自由化などの影響を受けながら、現在のナーグプル市の仏教徒による解放運動に至ったプロセスを検討している。

第3章では、現在のナーグプル市の仏教徒を取り囲む環境という観点から仏教徒たちの概略を明らかにし、ナーグプル市において行なわれた著者のフィールドワークの概略が述べられている。

第4章では、ナーグプル市の仏教徒活動家たちに注目し、彼らがアンベードカルの教えを通じて「アンベードカル化」され、差別に抗するアイデンティティを確立してきたプロセスに目を向け、アイデンティティ・

ポリティクスの利点を考察している。また同時に、アンベードカルの教えを基礎として構築されてきた仏教文化自体についても検討している。

第5章では、ナーグプル市の仏教徒が仏教儀礼を既存の枠組みから読み換えることにより、「祝福の論理」が維持され、仏教徒たちが超自然的な神の力を受け取ることができるとともに、改宗後の宗教と改宗前の宗教との繋がりを保たれていることが明らかにされている。

第6章においては、「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒」たちが、家族的な愛情を動機として、戦術的な「脱カテゴリー化」を行ないながら、ヒンドゥー教の神々への礼拝やヒンドゥー教の祝祭への参加を続けていることを叙述している。そして、この戦術的な取り組みにより、関係的・場所的アイデンティティが構築されていることを考察している。

第7章では、仏教徒の間で境界的存在が排除される問題を取り上げている。ここでは、仏教徒活動家たちが、アンベードカルの教えを絶対視し、仏教徒たちに本質主義的なカテゴリーを当てはめることにより、そこから外れる境界的存在が、「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒」や「改宗キリスト教徒」といった「他者」として創出され、差別や排除の対象となることを検討している。

第8章では、アンベードカルの教えを広める活動に熱心に取り組んでいる二人の若い仏教徒活動家を取り上げ、アンベードカルの教えを絶対視することにより、「過激派」と呼ばれる仏教徒活動家自身が、アイデンティティ・ポリティクスを推進するアンベードカルの教えの順守と家族的な愛情の繋がりの間でジレンマに直面していることを叙述している。そして、この二者択一の問いに対し、どちらを選択してもアイデンティティ・クライシスに陥ることを検討している。

第9章と第10章では、ナーグプル市の仏教徒が、如何にジレンマを乗り越え、アイデンティティ・ポリティクスとは別のやり方を創出しているのかを示している。まず、第9章では、「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒」を中心とする仏教徒たちが日常生活レベルから立ち上がる生き方を考察している。特に、祝福の論理にある神の前の平等という考えと「開かれた親族」について検討することにより、仏教徒たちが改宗における読み換えや戦術的な取り組みによって他者受容の場所を確保しながら、閉鎖的・排他的共同体と家族的な愛情による対面関係の網の目の両者を生きていることを示している。

第10章では、佐々井の「闘争仏教」の思想と実践、また、平等思想である「一音教」の思想と実践に目を向け、佐々井の思想と実践から立ち上がる生き方について検討している。ここでは、佐々井が仏教を基盤として自らの経験を解釈し、自らの思想と実践を構築・再構築していることを明らかにし、差別に抗するアイデンティティ・ポリティクスとともに生きながら、貧困や病気に苦しむ人々を救いあげるあり方について考察している。

終章では、再帰的近代化の時代における人類学の実践的関わり方について考察し、本研究における議論を総括している。

審査の結果の要旨

本研究は、インドにおける仏教徒「不可触民」を対象とした継続的なフィールドワークによってなされており、そのデータを基にして包括的な叙述を提示した民族誌として最初のものである。また、社会運動を正面から取り上げるということにより新たな人類学の新分野を開拓した研究としても特筆されるべきものである。著者はまず、インドにおける「不可触民」差別の問題を政治文化との関わりから深く、かつ広範にアプローチし、複雑に絡み合う問題群を整理している。具体的には、尖端的運動に頻繁に見出されるアイデンティティ・ポリティクスの功罪を的確に指摘しながら、そうした観念的な運動の平面とは異なる、より日常的な慣習行為における大多数の「不可触民」の宗教文化への取り組み方、つまり「半仏教徒・半ヒンドゥー

教徒」という様態を日常を生きる人々の戦術として取り上げている。解放運動家から見ればオーソドキシィから外れたこうした宗教へ関わり方は排斥される類のものであるが、数千年にもわたるヒンズー教文化の慣習は一朝一夕に消失するものではなく、たとえば親族関係は一般的にヒンズー教文化の慣習にまだ根差しているといっても過言ではない。「不可触民」の中の「普通の人々」はそうした現実を生活している。著者はそうした現実をフィールドワークの観察によってよく明らかにしており、さらにそうした解放のパラドックスともいうものを超えるあり方を、日本人仏教徒佐々井秀嶺の一宗教を超えた実践に見出しており、自らの提起した問題に現時点で一定の解答を提示している。

一方、著者は理論的にも野心的に取り組む姿勢から多様な概念を分析・考察に適用しているが、その際、概念の精密さを多少欠く個所もわずかながらみられる。また、たとえば「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒」の日常的な「戦術」という概念に対し、佐々井の普遍的な「戦略」といった、より厚みのある概念の体系化へと踏み込んでゆくことも今後求められよう。

本論文は、一般的に文化人類学の先端の議論を批判的に考察した上で、各所にほぼ的確に適用しており、現代的な人類学研究としても、さらに解放運動研究としても、十分に学界に貢献しうるものとして評価できる。

よって、著者は博士（国際政治経済学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。